

東京外国語大学国際日本研究センター講演
2010.10.16

台湾の「宜蘭クレオール」について

Yilan Creole in Taiwan: A Japanese-lexicon Creole

真田信治
(奈良大学文学部教授)

1 台湾に渡った日本語

戦前台湾の人口

年	本島人	内地人	朝鮮人	外国人	全人口
1930	4,313,681	228,281	898	49,677	4,592,537
1935	4,882,945	270,584	1,474	57,423	5,212,426
1940	5,510,259	312,386	2,376	47,063	5,872,084

表は国勢調査の結果にもとづいて発表者が作成した。

在台「内地人」(日本人)

□出身地:日本人の約70%が西日本出身者。人数の多い順に
鹿児島、熊本、福岡、広島、佐賀、長崎、山口と
なっている。

(台湾総督官房臨時国勢調査部1937『昭和十年国勢調査結果表』)

□職業:公務員・教師・警察・農業等。

□農業移民村: 官営移民村13 (1942年現在)
私営移民村 5
自由移民村 3

(台湾経済年報刊行会1942『台湾経済年報』)

「国語」(日本語)教育制度

• 初等教育

日本人	小学校
漢民族 行政区域内原住民族	公学校 (蕃人) 公学校
行政区域外原住民族	(蕃童) 教育所

日本語と台湾諸語との接触

- ① 現地語と日本語とのバイリンガルの発生
【現在の高年層の日本語】 →台湾各地
- ② 現地語の中への日本語要素の借用
【日本語を起源とした借用語】 →台湾各地
- ③ 現地語と日本語の接触による新しい言語の形成
【宜蘭クレオール】 →宜蘭県のみ

宜蘭県の特異性

- ◆ 樟腦の重要な生産地。
- ◆ 在住日本人警察の比率が高い。
- ◆ この地域はアタヤル語変種の多様性が他の地域にくらべ顕著である。

7

宜蘭在住警察の数

年	警力 (*は警手)	原住民族	比率 (原住民：警力)
1909年	1691人	4351人	2.6:1
1925年	304人*	4910人	16:1
1928年	375人*	5052人	13:1

※台湾全島における原住民：警力は平均的に31:1。
 雅宜君2001『宜蘭県人口與社会変遷』宜蘭県政府のデータに基づいて発表者が作成。

8

「内地人」に対する態度

	好感信頼	普通	反感
東岳村	90	142	0
金洋村	69	0	0
澳花村	150	91	0
寒溪村	498	144	0
碧候村	53	289	22

台湾総督府1937『高砂族調査書』第三編のデータに基づいて発表者が作成。(人)

9

2 宜蘭クレオール

☆簡月真(東京大学特別研究員・台湾国立東華大学副教授)との共同研究。

10

宜蘭クレオール

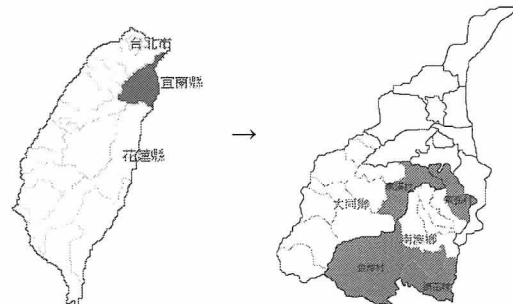
- アタヤル語と日本語との接触によって生まれた新しい言語。
- 台湾東部の宜蘭県に住む一部のアタヤル人(のすべての世代)によって使用されている。



「蘇花公路」2008年2月撮影

11

宜蘭クレオールの分布



12

地元での呼び名

- tang-ow no ke • tang-ow no hanasi (東岳村)
- kangke no ke • kangke no hanasi (寒溪村)
- kinus no hanasi • 博愛路的話 (金洋村)
- zibun no hanasi • 日本土話 (澳花村)
- nihongo • 日語 (4村)

◎1936年生まれ男性(東岳村):「これはわれわれの母語であるが、日本語そのものではない。正式な日本語は別にある」。日本語との違いを明確に認識。

◎話者数:推定約3000人(潜在的な話者も含める)。

13

宜蘭クレオールの使用状況-東岳村

生 年			
1930年代 ~1940年	1940年代 ~1950年	1950年代 ~1970年代	1980年以降
(Atayal / Sediq) (Japanese) Yilan Creole	Yilan Creole (Chinese)	Yilan Creole Chinese	(Yilan Creole) Chinese

()は全体的に該当言語がほかの言語ほど使われていない、もしくは使えないことを示す。

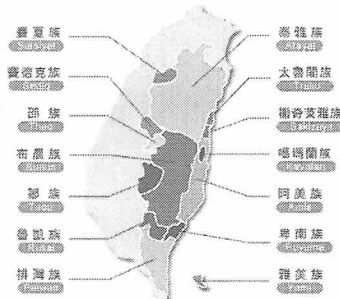
◆1930~1940年生まれの話者の親世代はpre-creoleを使っていたと推測される。

14

3 宜蘭クレオールの発生要因

15

台湾「原住民族」の分布(略図)



台湾行政院原住民族委員会ホームページより引用

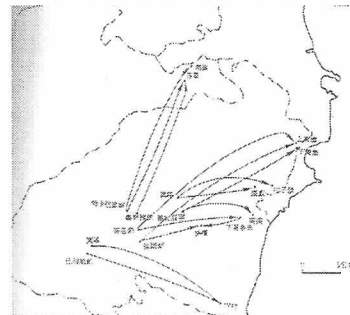
16

宜蘭クレオール使用の4村

- 4つの村の住民たちは、もともと宜蘭県「南澳郷」の山奥に住んでいた。
- 1912年から日本当局による原住民族集団移住政策が始まり、アタヤル人とセデック人が混住させられた。
- アタヤル語とセデック語は同じアタヤル語群に属するが、約1600年前に分化した。両言語は互いにほとんど通じ合わない(李壬癸1996『宜蘭縣南島民族與語言』宜蘭縣政府)。
- しかし、当局によって両者は「アタヤル族」として一括された。

17

アタヤル人とセデック人の移住



鍾郁芬1995『南澳山地之聚落發展：從清代至光復後』
國立臺灣師範大學地理學系研究所・修士論文

18

移住による言語接触の結果

- ①セデック語がアタヤル語にシフトした村がある。

(台北帝国大学土俗人種学研究室1935『台湾高砂族系統所属の研究』刀江書院)

- ②一方、意思疎通のために、lingua francaとして日本語をベースとした接触言語を用いた村もある。(その接触言語を第一言語とする世代が生まれ、「宜蘭クレオール」へと発展した。)

19

東岳村の変遷

現在の村名	移住後の集落名	移住前の集落名	人口の構成	移住年
東岳村	上東澳社	ゴーゴツ社 キンノス社	Cu'li' + Tausa Cu'li' + Tausa	1913年 1913年
	下東澳社	タビヤハン社	Cu'li'	1913年

※台湾総督府警務局1938『高砂族調査書(第5編)』台湾総督府、台北帝国大学土俗人種学研究室1935『台湾高砂族系統所属の研究』刀江書院などを参考に発表者が作成。

➢1915年「東澳教育所」設置、日本語教育開始。

↓

Cu'li'とTausaが意思疎通をはかるために、Cu'li'アタヤル語とTausaセデック語を基層とし、日本語を上層とする接触言語を用いた。

20

4 現在の言語政策と宜蘭クレオール

21

普及政策の一環として

- 原住民族諸語の使用を奨励する政策
 - ・2001年から「原住民族語言能力認證考試」
 - ・2007年から「原住民族學生升學優待取得文化及語言證明考試」
 - ・合格者は高校と大学入学試験の点数が下記のようにプラスされる。

	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年
合格者 優待率	35%	35%	35%	35%	35%	35%
不合格者 優待率	25%	25%	25%	20%	15%	10%

22

言語権の主張

- 2006年、寒溪村の住民が積極的に自分たちの言語権を主張した結果、地元のことはアタヤル語の一方言（「寒溪泰雅語」）として認められるようになった。
- 2006年にテキスト「寒溪泰雅語学習手冊 第一階、第二階、第三階」が作られた。
- 毎年、試験のために研修会が行われる。📄
- 2011年から検定試験から外されることが公布されている。

23

5 宜蘭クレオールの調査

24

宜蘭クレオールの調査

◎文献調査と現地調査：2006年より開始。

◎現地調査：

- ・音韻，語彙，文法などに関する記述調査。
- ・自然談話収録

- (1) 村の協会との共同研究で，村出身の若者が年配者にオーラルヒストリーの調査を行う。その際の談話を録音。
- (2) 家族や友人が会話する場面を録音。
- (3) 自然傍受した会話。

25

第8課 lenwa sye(電話する)

- 1A: oy, anta bla, waha ga Pusing, anta ga tare?
(もしもし, こんにちは。わたしはPusing。あなたは誰?)
- 2B: waha ga Hayung. (わたしはHayung.)
- 3A: Hayung kosi yube, Yusiy ngasal aru ga?
(Hayung, ちょっと教えて, Yusiy お家にいる?)
- 4B: Yusiy koci nay, zibung tanux ita.
(Yusiyはこっちにいない。彼は外に行った(出かけた)。)
- 5A: anta wakarū zibung icu ngasal kuru no?
(彼がいつ家に来る(帰る)のかわかる?)
- 6B: sugu kuru mo, mate. (すぐ来る(帰ってくる)。ちょっと待って。)
- 7A: yaba arigato. (どうもありがとう。)

(「寒溪泰雅語学習手冊第三版」第8課より、日本語訳は発表者)

26

6 宜蘭クレオールの特徴 — 東岳村の場合 —

27

音韻

- ◎音韻体系および韻律はアタヤル語と基本的に同様。
- ◎ただし、日本語の影響で、アタヤル語には存在しない/d/が認められる。
例: denki < 電灯 > denwa < 電話 >
- ◎アクセントは文節の最後の音節か最後から2番目の音節に置かれる。これはアタヤル語およびセデック語の影響と考えられる。

28

語彙

◎1974年生まれの女性をインフォーマントとして調査した結果：

基礎語彙の約70%：日本語を起源とする

約30%：アタヤル語を起源とする

↓

宜蘭クレオールはJapanese-lexicon creole

29

植物語彙

kusa (草)	daykong (大根)
yasay (野菜)	ali (筍)
uluh (芋の茎)	mala (クワレシダ)
tehuy (芋の根)	tetun (玉蜀黍)
ngahi (さつま芋)	tomato (トマト)
en-gen (いんげん豆)	nasubi (茄子)
bawan (カボチャ)	negi (葱)
kyuli (きゅうり)	hana (花)

30



basyo
(バナナ)

宜蘭クレオールの語彙の特徴

- ◎ 西日本方言の語彙の使用
例) taru・taku等
- ◎ 日本語形式との意味の違い
例) amerika：欧米人
hakama：スカート
- ◎ 日本語由来の語彙とアタヤル語由来の語彙の棲み分け
例) ici, ni, san
utox ninggen, saying ninggen, tугan ninggen

人称代名詞

一人称		二人称		三人称		疑問称	
単数	複数	単数	複数	単数	複数	単数	複数
wasi	wataci	nta	ntataci	are	aretaci	dare	daretaci

- 基本的には日本語由来の人称詞が使われている。
- 接尾辞-taciで複数形が作られている。
- 上下関係や文体、性などによる分化はみられない。
【単純化】

意味の拡張

- ◎ otoko：男・夫・オス
例) wasi no otoko (夫)
- ◎ onna：女・妻・メス
例) wasi no onna (妻)
- ◎ zyoto：上等だ・優しい・親切だ・良い
例) are no tunox zyoto (彼は頭が良い)
- ◎ haku：穿く・履く・着る
例) mongpey haku (ズボンを穿く)
kucyu haku (靴を履く)
lukus haku (服を着る)

語構成

- ◎ kokangsuru (交換する)
 - ◎ amesuru (雨が降る)
 - ◎ pemasuru (体を洗う)
 - ◎ mohisuru (濡らす)
 - ◎ 住suru (住む)
- [高年層] [若年層]
- ◎ yasumu > yasumusuru (休む)
 - ◎ horu > horusuru (掘る)

suru: 動詞化接辞

文法

- ◎ 単純化
(1) are ga sensey **cigo**.
彼/彼女は先生じゃない。
 - (2) are **lela** ga sensey **cigo**.
彼/彼女は先生じゃなかった。
- ▼ 過去テンスは「じゃなかった」という形態的処理の代わりに、「lela」という時間副詞で語彙的に表す。
- ▼ 「じゃない」という形態的処理の代わりに「違う」という語彙的な形式を用いる。

文法

◎ 再編成

(3) kino walaxsinay / *walaxsang. (*は非文を表す)
(昨日は雨が降らなかった。)

(4) ima walaxsinay / *walaxsang.
(今は雨が降っていない。)

(5) kyo *walaxsinay / walaxsang.
(今日は雨が降らないだろう。)

↓

過去	現在	未来
-sinay	-sinay	-sang

文法

(6) kino samuysinay / *samuysang. (*は非文を表す)
(昨日は寒くなかった。)

(7) ima samuysinay / *samuysang.
(今は寒くない。)

(8) asta *samuysinay / samuysang.
(明日は寒くない。)

↓

過去	現在	未来
-sinay	-sinay	-sang

否定辞にみる再構成

宜蘭クレオールにおけるnayとng

既然法 (realis)	未然法 (irrealis)
nay	ng

- ・ 既然法とは、その動作がすでに行われている、或いは、行われたことを表し、未然法とは、その動作がまだ行われてはいないことを表すものである。
- ・ もともとのアタヤル語の「既然法」「未然法」という枠組みに日本語の「ない」と「ん」の2形式を巧みに取り込んで体系化が図られているのである。

宜蘭クレオール

- ◎ アタヤルとセテックが意思疎通のために形成し、第一言語として発展してきた言語。
- ◎ 日本語が語彙供与言語。
基層のアタヤル語の影響が顕著。
単純化などの変化も加わって、再構成が行われている。
- ◎ 日本語母語話者・アタヤル語母語話者が聞いてもわからない。独自の体系を持つ言語である。

おわりに

- これまでのクレオール研究は欧米諸語が語彙供与言語となっているクレオールの研究が中心であったが、この宜蘭クレオールの解明は斯界に貴重な研究事例を提供するものとなる。

参考文献

- 真田信治・簡月真2008「台湾における日本語クレオールについて」『日本語の研究』第4巻2号pp.69-76日本語学会
- 真田信治・簡月真2008「台湾の日本語クレオール」『言語』第37巻第6号pp.94-99大修館書店
- 簡月真・真田信治2010『台湾「宜蘭クレオール」の基礎語彙集』(科研報告書) 奈良大学
- 簡月真・真田信治2010「東台湾泰雅族的宜蘭克里奧爾」『台湾原住民族研究季刊』第3巻第3期pp.75-89國立東華大學原住民族學院
- Chien, Yuehchen and Sanada, Shinji. 2010. "Yilan Creole in Taiwan." *Journal of Pidgin and Creole Languages*, 25:2, pp.350-357.